

## からだの対話

竹内 敏 晴（南山短期大学教授）

### A ひとつの誤解

初めにひとつの誤解があった。それは日本語での、“対話”という言葉の曖昧さに、私がきちんと気づかなかった事による。演劇出身の私としては、対話と聞いた途端に、ダイアログと思い込んだ。周知の通りダイアログという言葉は、問答とか、対話とか訳されるけれども同時に、劇中のひとつのシーン、主人公とその相手とが1対1で話し合いをする、あるいは討論をする、その部分、あるいはその部分を為す台詞そのものを指す。私の頭の中は、たちまち、古典的なダイアログの代表とされる、オイデプスと予言者テイレスiasや、ノラとクログスタトのやり取りが頭に浮かぶ。言葉と言葉が吟味し合い戦い合って、相手の根底を崩したおのれを確立してゆくという作業が、一言一言に激烈にひしめきあい、その発展の末は、ある共通の認識、あるいは事実が、立ち現れてくる。それは、ダイアログのギリシャ語—「ディアロギス」の原義そのもの「ロギスを分かち合う」ということに他ならぬ、まさに〈ことば〉の戦いである。ということは、ダイアログとは極めてロギス的な行為であって、からだが行うることなのかどうか。

ところが、ブーバーの“対話”と訳されている著書の原語は、Z W I E S P R A C H Eである。これは二人で話す、二人での言葉という意味であって、日本語では対談とか、会談とか訳されている。日本の辞書で、対話を「向かい合って話すこと」といった安易な訳し方をしているのと、それほど違いはないようである。となると課題の“対話”という言葉の内容は、ダイアログということに止まらぬだろう。ブーバーの基本的な考え方は、人とは語りかけられているものであり、それに答えることが人間の行為であるということのように、私は理解している。多分、ブーバーが「語りかけ答える」という言い方をする

イメージの根底には、モーセが燃えている草むらを見て、不思議に思って近づくと、その炎の中から神がモーセに呼びかけ、そしてそれにモーセが恐れつつ答える、あのやり取りが原型としてあるのではあるまいかと私は想像する。これは単に人と人とが、愛憎とか、利害とかでぶつかり合い交わし合う、掛合という狭いイメージではない。ブーバーは、その“対話”、あるいは、“自伝的断片”と呼ばれる別の著書において、少年の頃の馬とのふれあいについて書いている。ふたつの、他者の間に交わされたある交流の素晴らしさ、それはまさに〈からだの対話〉と呼ぶにふさわしい。と共に、その脆さについてもかれは書く。私がそれに近いものとして自分の体験を探るとすれば、「ことばが劈かれるとき」（思想の科学社、ちくま文庫刊）に記した、ひろし君という、当時精神薄弱児と判定され、あるいは当時の呼び方で、自閉症ではあるまいか、といわれた少年との出会いの体験がそれに近いだろう。それは ZWIESPRACHE の英訳と dialogue と並んで訳される conversation の原義に近いと言えるだろうとも思う。そこまで「誤解」を広げて考えてみることにする。

## B ガラスの壁

近ごろは、話をするということになると、必ずマイクが用意される。きき手が500人、1,000人という場合には仕方がないが、せいぜい30人、40人相手のレッスンの場合でさえ、マイクをつきつけられる。特に、高い演壇のものものしいテーブルに、テキストなどがお客から見えないように囲いがついていて、そこにライトとマイクが突き出されている、といった装置の前に立たされるとなると私はかなり動揺する。まず第一にきき手から隔離されて閉じ込められてしまう感じが私を圧迫する。仕方がないから、「段々慣れていきますからしばらく立往生したりするのを許して下さい」と言わざるをえないことになる。

マイクでしゃべった言葉は、会場にスピーカーで流され、その音は当然、私にも聞こえてくる。つまり私は、私がしゃべったことばのエコーの中にいるわけであって、このエコーが余りに甚だしいときには、私は自分がしゃべっている言葉の中に閉じ込められてしまって、外へ出られなくなる。多くの人々の目の前に立っていないながら、その人々と切り離され自分だけの世界に閉じ込められてしまって、息苦しくなり、余りに甚だしい場合には、言葉がでなくなってしまうことさえある。実は、そればかりではない。

なぜマイクがいやか。それは耳が悪く言葉が不自由だった私が、耳は聞こえるようになったけれども、言葉がうまくしゃべれなかった時期の体験と重なるからである。

私が、なんとか普通の人のようにしゃべれるようになってから、まだ20年にならない。その以前に、私が苦しんでいた状態は、それが破れた後で初めて自覚できた事であったけれども、いわば、大きなガラスの壁が自分の目の前にあって、自分はちょうどテレビ局のモニタールームに入っているような感じであっ

たと言えば近いだろう。相手の人に話しかける私のことばは、どこからか（例えばマイクとスピーカーを通じて）相手に伝わり、相手はそれを理解しているということ、私は目でみて知るけれども、じかに相手の人に話しかけていると言う感じは、まったく持てないのであった。また相手の発することばも、目に見えないスピーカーからわたしに伝わってくることであって、ことばの意味や、それに含まれている感情は理解できるけれども、じかに相手が私に訴えてくると言う感覚は、持つことが出来なかった。現在、マイクの前で大勢の人に向かい合うとき、私の中に起こってくる一種の恐怖は、そのころの、どうしても相手の人とじかに触れじかにつながる事が出来ない、という息苦しさを思い起こさせる、と言うよりも、それと同じ状況に私を追い込んでしまうからなのである。

発声の訓練をしているときに、突然それが破れていった過程は、「ことばが劈れるとき」に書いた。他人にじかに私の言葉が、つまりはおのれ自身が触れることが出来た、と言うより現に触れているということに気づいた時の喜び、相手もじかに私に触れてくるという驚きと、喜び。人と人は本来じかにつながってこの場に生きているのだという発見、それは新生ともいってよい鮮やかな体験であって、それ以後、私にとっては人と触れ言葉を交わすと言うことが、ひとつの祝祭となった。レッスンとは、私にとって、その喜びを鮮やかにする、あるいは改めてそこに生きる場であって、その時に相手の人が、人に触れた事に気づき、あるいは人に支えられながら自分を越えていく、また声がひらかれてゆく、その命の動き始める姿に立ち会う喜びが、私を20年間いわゆる“からだごとことばのレッスン”、あるいは芝居の稽古という行為を支えてきたのである。

しかし、現代はわずか数十人の相手であっても、マイクを用意するのが当たり前として成り立ってしまう。ということは、人と人とじかに触れるということには全く無関心で、それを断ち切っていく時代であると言いうるだろう。逆にいえば、ガラスの壁を社会の側から、しつこく用意してくる時代であると言ってもよい。名所、聖地で、よく出会うのは、カメラを2台も3台もぶら下げて、ありとあらゆる所で、シャッターを押している人々の姿である。人はもう自分の目で、素晴らしく美しい、あるいはきびしい風景、人々、あるいは建物を見ない。ただそれを、フィルムに納めるために見ている。人の経験は全部、映像化するというひとつの行為において均一化されて、神聖なものも、汚いものも何もなくなただアルバムに貼こまれ、その人自身の体験とすりかえられてゆく。カメラとは、元々は人がものを見る、その目じたいを拡大し、見ることの可能性を新しくしたものであったはずだが、今は人とものとの間に立ちふさがって、人がものをじかに見、じかに触れて感じることをシャットアウトする道具になっているかのようだ。人の体験ということの剥奪がそこに起こる。これも一種のガラスの壁ではないか。となると、文明とは、つまるところがガラスの壁の造

出作用に過ぎないのではないか、という怖れが私を襲う。少しおおげさに言えば、亡びがひたひたと迫ってきている。

### C 異様な風景のいくつか

まず、異様におもわれる、日常風景のいくつかを点描してみよう。おそらくは（ガラスの壁）の造出作用の断片であろうから。そしてそれを、（からだの対話）の凍結、いやむしろ切断作用のいくつと呼んでもよい。

#### 1) 幼児教育の現場（幼稚園など）あるいは家庭において

“大きな栗の木の下で”という誰でも知っている歌がある。これにまた誰でも知っている簡単な振りがついている。“大きな栗の”で前か上に大きく両手で円を作り、“木の下で”は頭の上、肩と手をおいて“で”で下に下ろす。“あなたとわたし”は右手で前と自分の胸を指し、“仲よく”では右手で左肩を左手で右肩を押え手を胸の前で交差させたまま、“遊びましょ”と身を右左に傾ける。“大きな栗の木の下で”のリフレーンは、冒頭の繰り返しである。始めてこの振りをみた時、私はあっけにとられ、ついで笑い出してしまった。が、この振りに対して幼児教育の専門家たちがげんそうな気配さえみせず、こどもたちに声援を送っているのを見ているとむしろ怒りがこみ上げてきた。

この歌詞に対して、こんな“自閉的”というほかないような振りを考えつく舞踏家が、世界のどこにいるだろうか。そしてまた、このひどい振りに対してだれも異議を申し立てることなく、日本中どこでも平気で踊られているということは——。こんな“自閉的”な民族は世界中にないのではないかとさえ、私はわめきたくなる。

もしこの歌詞をもとに振りをつくるとしたら、各民族、各個人によって、ニュアンスは当然ちがうだろうが、基本はたった一つしかない。

“大きな栗の木”はどのくらい大きいのか。ひょっとすると天までとどくほどかもしれない。それを見上げ、あるいは指さして、その幹のまわりによっていく。“あなた”と呼びかけて手招きするか、あるいはその相手の所へよって行って、“仲よく”で手をとってひっぱってくるか、並ぶか。そして手をつないで踊り出す。これだけだ。大きな栗の木、そしてあなたとわたし、この交流しかこの歌は語っていないのだ。それなのにこの“日本”の振付けは、“栗の木”も“仲よく”も、ただひとりっきりに閉じこもって、説明的と呼ぶのさえ恥ずかしいような貧しい身振りを繰り返すのである。ここには人と人、からだとかからだのふれあいかかわりあいなどハナから視野に入っていない。“人”と“教育”とがある。「ふれあい」を唱え「国際化」を叫ぶ教育者たちはなぜ盲目なのか。

## 2) 三角坐り（小、中学校の教育において）

女子学生たちが大勢で、床（あるいは地上）に坐り込む場合、まず90%までが両膝をそろえてピタリと合わせて立て、両腕でそれをかかえ込む。この異様な風景に気がついたのは5～6年前だったろうか。現在30才代以下の方は、ほとんどがこの症状を示す。40才代後半以上の方は、全く経験したことがない姿勢である。ということはもともと少なくとも日本にはなかった坐り方だということになる。いったいこんな坐り方は、いつ、だれが、どうして始めたのだろうか。

尋ねてみるとたいていの人が、小学校で教えられたという。「こういう坐り方をしてみたいと思ったり、いい気持ちだと思ったことのある人はいるか」と尋ねてみると、いない。教師に強いられてとった姿勢である。教師に「なぜこういう坐り方を子どもたちにさせるのか」と尋ねてみると「せまいところに詰め込んで坐らせるのには都合がよい」、「うろうろ動かないので静かである」などの答えが返ってくる。つまり、教師が手間をかけずに子どもたちを静かにさせておくために考え出された統制術であるらしい。

この姿勢を試みにとってもらって「息を深く吸って下さい」と言うとみな笑い出す。次に「息を深く吐いて下さい」と言うと苦笑いになる。これは端的に言えば息の出来ない、つまり胸と腹を動かさないでいる姿勢である。ということは、声を発することを禁じられた姿勢であるということである。さらに両手で膝をかかえているわけだから、これを日本の古い言い方で表現すれば“手も足も出ない”姿勢を強いられていることになる。

このような非人間的な姿勢を、教師たちは、人間にとってどういう姿勢かという吟味を一切省みることなく、自分たちの便宜というだけの理由で子どもたちに強いてきているのである。

多くの人に尋ねてみて、ほぼ判ってきたことは、小学校において1960年代以前には行われた痕跡がほとんどないこと。それなのに1970年になる頃には全国の小学校で少なくとも体育の時間には一律に強えられるようになっていたということである。

これは文部省の行政的な指導によったのもではどうもないらしい（まだ明確でない）。それはこの呼び名が体育坐り、体育館坐りなどまちまちであることによって推察できる。表題にした“三角坐り”は関東地方だけの呼び名のようなようである。

ひとりつくねんと手も足も出さず、息をひそめて坐り続ける——なんという対話の拒絶態だろうか。これもまたいつのまにか全国にひろがり、そしてだれ一人それに異議を唱えない事象の一つである。こうして、なにかの支配が確実に進行していくのである。

### 3) 役割としての声（大学と職場において）

もう一昨年のことになるが、ある新聞に日本人を妻としているフランス人の男性のことがのっていた。「日本の若い女性はどうして一様に、ああ細いカン高い声でしゃべるのだろう」と、きいた日本の男性が「かわいいと思わないか」ときくと「きもちがわるい」と答えたという。「あれは演技だ、フランスだったらその人の声はその人の個性そのものとみなされる、それが作りものだったら軽蔑されるだけだ」と。

なぜ大学生から若いOLまでくらいの若い女性が、均一化したかよわいひどく細く高い声でしゃべるのかは、私も5年ばかり前から気になっていた。胸をひどく浅くせわしなく上下させることと、息を吐ききらず語尾のみこんで、上目づかいになる（身——あるいはあごを退いている）ことが見えていた。胸がおちこみ、腰が前へ——ということは尻がおちているということである——。膝が曲がってしかもピタリとくっついている……。

これを別の目でみると、私の知人の報告する中国の通訳の観察になるだろう。「私には中国人と日本人は一目で見分けがつかます。」と彼女は言ったそうである。「日本の人は（特に女の人）内輪で歩く。昔、中国には纏足という悪い習慣があったけれど、現代ではそれはどうやら日本に移ったようですね」と、彼女は皮肉を言ったという。これは中国の女性のズボンで颯爽と歩く姿と対比してみないとリアリティが湧かないが。

なぜこのような現象が一般化してきたのか、これもよく経過がわからない。ただここには明かにひとつの美学が前提されており、若い女性たちは、それに自らをあわせようとしているのだ、ということはたしかである。ではその美学とはどんなもので、だれが、なんのために作り出したイメージなのだろうか。

新入の女子社員が元気いっぱい「おはようございます」と挨拶する。研修やら、訓示やらで明るくテキパキと言われているから精一杯つとめている。先輩の男子社員たちも花が咲いたようなにぎやかさに、ニコニコしている。ところが、年輩の管理職の人たちは、一旦、直接に挨拶される段になると、ふっと、どこか渋い顔になる。

彼らの言うところによると——「たしかに明るくて結構だ。だが上役に対する態度としては乱暴で、元気すぎる。遠慮会釈なくツカツカ人の領域に入り込んでくる感じがする。」——という。彼にとってみると、新米の女の子に対等扱いされ、むしろなにか上役としてのボーダーを侵犯された感じがするらしい。結局、上役に対するには、もっと距離をとって一言一言でいねいに、荒々しい息づかいをしないように——と、これは直接に言うか、誰か下役を通じて注意させるか、ということになる。

この結果は——女子社員は平静に装った顔で語句を明瞭に発音し、そして語尾になるとすっと息をのみこんで声を低める。身体的には、ほとんどの人があごを引いて長い髪を頬をかくすように垂らし、上目づかいになるか腰をひくか

するのである。これが一般的上役の満足する“慎ましやかな女の子”の像であるらしい。

つけ加えると、当人に対してはこのような応接を要求する上役が、事務上の同僚あるいは外部の人とのやりとりにおいては、「語尾まではっきり述べろ」と命ずるのが普通である。ことばを相手のからだに直にふれないように、しかも語尾はハッキリと、となればことばは相手ではなく不特定多数に語るかのように平面的に、語句だけは明確に発音する方法にならざるを得ない。冷たいモノトナスな口調がそこに生まれ、而もそれをよしとされることになる。声もユング流に言えばペルソナの一部であろう。だから、事務上の発声発音が生まれる場合もありうるだろう。だがそれが、とり外し不可能になったとしたらそれはもはやペルソナとは言えまい。それは“のっとられたからだ”である。前述したフランスの男性が“気味がわるい”と言うのも当然であろう。

#### D 〈対話〉 への出発

これらに象徴される「ガラスの壁」の造出作用を破る試みはどこにあるのか。その1つとして、〈からだ〉で〈対話〉へ出発してみよう。

からだとして存在する私とあなた、人と人、とが働き、働きかけられ、答えるということのいくつかの段階を歩いてみよう。

ただその前に「からだ」とはなにかについて私の考えを引いておこう。

—私にとって、からだとはまず、私のことである。私はからだとしてここに在り、世界に向い、世界の内に在る。からだは動き、働きかけ、語りかけ、意識はそれを追ひ、跡づけ、そして確かめる。これが私にとって根源的な「こと」であって、その働きかける手の、まなざしの、こえの先に、他者のからだは現われる。そしてからだとは自と他の間に現われる空間でもあり、働かかけ反応する相互の動きであり、変幻する意味のことである。（時満ちくれば、筑摩書房より）

#### LESSON. I “触れる”

1. とりあえず、この個体としての〈私〉、個別化され閉じられた〈からだ〉から出発して他者へ至ろうと試みしてみる。

2人で組を作り（これ自体が〈からだの対話〉の重要なステップであるが今はふれない）まず〈私〉が相手に手をさしのべ、肩あるいは腕に触れてみる。

こわごわとひとりが相手の肩に手をおく。そこで触れられた人に「どう感じますか」とたずねると、「感じるって……」と、困惑した顔をするのが大部分である。ついで、「なんにも、別に」という答え返ってくることが多い。「さわられています」という返事には吹き出してしまった。

「それをあなたはどう感じますか」と押し返してきくと、初めて相手の顔

をちらちらと見て少し考える。「どうも相手の人は、何か私に遠慮しているみたい」とか、「無理に元気よくしているよう」とか、つぶやく。「それは相手がどういう状態であるかについてのあなたのいわば客観的な判断でしょう」と私が言い、「判断ではなくて、あなたがそれは嫌な感じか、それとも良い感じがするかといった、極めてプリミティブなことを、きいてみたいのだけど」というと首をかしげて黙ってしまう。つまりは自分のからだをニュートラルな位置において、感じるということ、相手とじかに人間的な関係を持つことは慎重に拒んでいるからだであるといってもいい。その段階で2人がお互いにどんな感じかを伝えあってみて、交代してやってみる。

2. そのうち「なにか落ち着かない」といったような返事がでてくる。やっと自分のからだの内なる感覚へ、注意が向き始めたということらしい。そこで、「それでは相手から離れたいですか、あるいは、もっと近づいた方が落ち着く感じがしますか」と尋ねてみる。本来なら、「ヘンだ」と感じたとき勝手に手を退いたり、身を離しているはずなのだが、からだが動いていないのである。ふれる人に「しっかり押さえたり、一たん離れてから強く手をあててみたりして感じを聞いてみたら」とも提案する。
3. 少しからだを動かして、ようやく「割かし良い感じですよ」とか、「ちょっと嫌な感じ」とかいう答えがでてくる。「良い感じだったら、もっとくっついてみたい?」ときく。嫌な感じだったら、はなれたいだろうし。はっきりさせるために一たん身を離して、さわらなくていいから、近づいたり、遠ざかったり、あるいは相手の後ろに回ってみるとか、左にいたのが右へ回ってみるとか、正面に立つとか、いろいろに動いて、相手と自分が1番落ち着ける位置を見つけてみて下さい」と提案する。それぞれは相手と話したり、「そうなのよ」と肩を叩いて笑ったり、しらけたまま遠くに立って、動かなかったり、様々な変化が起こり始める。

ある人は「相手の肩の後ろに立たないと落ち着かない」と言う。相手としては自分の見えない所にいられたのでは落ち着かないからどうしても相手を見ようとすると、相手がまた背後へ逃げ込もうとする。なかなかお互いに落ち着ける位置が見つからない。あるいはあべこべに「相手が目の前に見えないと落ち着かない」と相手の正面に立つ人もある。相手は並んでみようとして、いろいろ試みってみるがもとの人は安心できない。こういうやり取りの中で、自分の好い感じ、嫌な感じがはっきりして来る。また自分を変えてみることで、相手が変わっていくのだという驚きを初めて味わう人も多い。

4. そこで、改めてひとりがひとりに手を伸べて触れてみる。「嫌」とか、「なんかほっと安心する」、といった感じが初めてのときよりずっとくっきりしてくる。

〈私〉はなぜ「イヤな感じ」と言われるのだろうか。「ほっとする」のはなぜだろうか?それを考えてみるために一連のいわば実験をやってみる。



- i) まず2人は離れて立ち、一方ができるだけ遠くから手をのばし、指をのばして相手にさわってみる。肘も指もピンとのばして指先だけで触れていくと、相手は、ほとんどかならず嫌な感じになる。「あっちへいけ」と言われてるようだとか、汚いものにイヤイヤ触られているような気がするとか言う。逃げだす人もある。
- ii) 今度は、肘を緩めて近付いて行く。だがやはり指先だけで触る。ちょんちょんと相手の肩をつつくというこのやり方は、実のところ、教師が子供たちに触れるときの、もっとも一般的なやり方である。あるいは手の平は肩においているけれども指先は浮いている。これは教師に限らぬが、同僚に触れるときの代表的なパターンの1つである。これらはすべてどこか手の一部だけで触っているわけで、相手からは、「遠慮している」とか、「嫌々だ」とか、「しなければならぬから仕方なく触っている」とか、様々な言い方がでてくる。
- i)、ii)での触れ方は結局、触りたくないのに触っている。ということでは自覚しないように、多くは自分のからだをニュートラルにして、感じないものに仕立てている結果になっているのである。あるいは相手を無意識のうちに押し退けている、拒んでいるということの変形に過ぎない。「触れる」ということは「触れる」ということであって、「触れたくない」と「触れている」との間には明確な一線があり、その間にはどんな工夫を試みようとも、漸次的な段階というものはない。触れるか触れないか、二つに一つであるということが、このようなステップを踏んでみることで少しずつ、人々のからだにはっきりしてくるのである。
5. 最後に、ひとりの後ろにひとりが座り、相手の肩か背中にぴったりと手のひらを当てる、当てるというよりは、相手のからだの暖かさ、柔らかさを自分が感じ取るつもりで、手のひらも指も柔らかくぴったりと相手に触れてゆく。そして触れられている人が深く息をしてみる。なん回か、深く息を吐いた後で自由な息に戻る。後ろの人は、そのまま相手に息を合わせる。このままじっと時を過ごす。わずか数分間であるが、1から4までのプロセスを経た後でこの体験をすると、多くの人がほっと解放されたような、あるいは上気した顔になって、「なんとも言えない」「良い気持ちだった」「相手の暖かさがしみこんでくるようだった」とか、「眠くなってきた」とか、あるいは「息が合ったり、合わなかったりする、その感覚の中で、相手と自分とがひとつになったり、離れたたりすることがまざまざと感じられた」というような感想を述べる人が多い。

実のところ、この1から5までは、触れられるものから言えば、主体がある客体に触れた（触れられた）という感覚の深まりのプロセスであって、まだ自分に触れてくるものがひとつの主体としての他者、生きている他者であ

るという認識にまでは至っていない。ただ、人と人とが触れ「合って」いるわけであるから、必ずしもそういう枠の中だけで感覚や行為がはたらいっているわけではなく、他者を感じ取り始めることも多いが。

付け加えておくと、触れることに集中していくと、自然と目をつぶっていくことが多い。視覚は相手を対象化し、相手と自分との間に距離をおき、空間の中に自他を位置させる働きを持つが、触覚はむしろ、相手と自分との間に距離をなくす、同化していく働きの方向を持つもののように思われる。

他者とのふれ合いを開いていこうと試行するレッスンとしては、この後に「押す」「しっかりと相手をつかむ」「引きよせる」などがある。

## LESSON. II “招く”

“とうりゃんせ”という、だれでも知っている民謡、あるいは童謡がある。これを皆で歌ってみる。ところで、歌詞について話し合っていてゆく途中で“とうりゃんせ”という言葉は、お通りなさいという意味から、この歌は通りなさいという人と、通ろうとする人との対話の歌だということになる。がこのことは、初めて気がつく人が多い。ここにも〈対話〉の欠落態があるわけだが、それでは「お通りなさい」といって、相手にうたいかける—つまり語りかける—ということが、どのくらい本当に成り立つか。

まず、歌詞を自分なりに日常使う言葉に言いかえて、例えば、「通って！」とか、「さあお通んなさい」とかと、相手に話しかけてみる。「あ、さそわれた」、「通ってもいいな」と感じた人は通ってみるということなのだが、言いかけられたとたん、相手はふき出したり、げん顔で尻ごみしたりすることが多い。なかにはニコニコして、「ハイハイ」と通ってゆく人もあるが、次ののべるレッスンを通じて確かめられてゆくと、ただことばの意味内容に従って、いわばそれに指示されて動いてしまったに過ぎないことが多い。（ことばを聞いてどう感じるかは、実は後に述べる「話しかけ」のレッスンの最初の段階が前提されているのだが、今はふれない）

1. 「お通りなさい」ということは、どういう行為かを話しあってみる。自分が立っている所へ相手を招いて、次に自分がいま立っている後ろの空間へ導いてやることであろう。まずは、相手を招いてくる力がなければならない。そこで「ちょっと来て」とか「いらっしゃい」、「おいでなさい」といった言葉で、相手を招くことをやってみる。本当に招かれた感じがしたならば、寄っていく。そういう感じがしなかったならば寄っていかない。という単純な次元に自他をおいて、正確に感覚を澄ましてみる。すると「あ、招かれた、よかった」と相手の方へ寄っていくという例は、まず3分の1もない。ほとんどの場合が、頭を傾げる。中には、招かれているというよりも、追い払われている気がするというのさえある。招かれているには違いないが、招かれている先に何があるのか、非常に怖い感じがするとか、キャバレーの呼び込みのように、商売で招いている、向こうの利益にするために招いている、と

という感じがするという場合、実に様々である。

そこでひと組、ふた組にやってみてもらって、みなで吟味してみる。

i) 「さあおいで、さあいらっしゃい」と言うのだけれども、ただ棒立ちでしゃべっているだけで、相手からみるとなんの働きかけもされていない、ただ声が聞こえてくるだけ。

ii) 手招きしつつ話しかけるのだけど、招く手をよく見ていると、自分の脇の方へすうっと流す。いかにもホテルのドアボーイか、キャバレーの呼び込みが客を迎えるような風情である。自分の方へまっすぐに相手と呼ぶのではなくて、必ず自分は脇にのいて、相手を自分の横へ通す。私は関わりはございません、という姿勢である。相手は寄っては来るけれども、遠くをまわって行く、あるいは近付いてきた途中で、立ち止まってしまうということになる。つまりは信用し切れないからだになる。

iii) 「来ないよ、どうする？」と私が言うと、やっと相手に近づいて行って話しかけるとか、手をとって誘うとかいう動きが出てくる。

2. 「招く」ということは、そもそも、どういう行為なのだろうかと考えてみる。「招く」ということは、相手を自分の世界へ呼び入れることである。他者を自分の世界に受け入れることであって、自分の世界を侵犯されないために自分は脇へ退いて、相手がすうっと遠くを通り抜けて行くのを眺めていれば良い、という態度は人にふれないように逃げていることであって、「招く」という人間的行為にはならないであろう。もうひとつ踏み込んでいえば、「招く」とは他者をして自己を侵犯させること——ここから先は他者を近寄せない、というボーダーラインが、どんな人にも心理的にあるわけだけれども、その——ボーダーラインを越えて相手を自分の世界へ踏み込ませるといことである。相手がひょっとして、凶器などを持っていたら刺されるかも知れない。にもかかわらず、相手を自分の世界へ呼び迎える、つまりは、自分を犯させることが「招く」といことの基本的行为であるまいか。

3. そこで三つの「招く」パターンを試みることがある。

i) 自分の周りに、あるボーダーを設定して、そこから決して指先を出さないで閉じこもり、ちらちら、ちらちらと相手を手招きして、「ちょっとおいでよ」と呼びかける。

ii) 相手を見ているようだが、実は相手のもっと向こう、背後の遠い空間を目指して、のび上がって、手を振りながら、「こっちへおいでよ」と大きく呼びかける。

iii) 2つを体験した後で改めて、相手をじかに見てみる。相手の肩に自分が差し伸べた手——それは直接にはもちろん触れてないけれども——をおく（つもりで）、その肩を自分の方へ引き寄せるように（つもりで）相手を招く。もちろん相手に近づいていってもよい。

iv) この3つを試みてみた後で、初めに自分がやった招き方は、そして相

手が自分を呼んだ招き方は、どのタイプだったろうか、と互いに吟味しあい話し合ってみる。3番目が、なかなか成り立たない人は、「触れる」レッスンに立ち戻って、向かい合った相手の肩に、実際に手を触れて、柔らかく自分の方へ引き寄せてみる。自分の世界へ招き入れるということを妨げる自分に、はっきり気づくことが人間であることの自覚であり、人間になることへの出発点であるわけだが、その要因に心理的な名づけをすることから、その処理を探る方向は、ここの課題ではない。むしろ行動し働きかけてみることで自分にぶつかり立ちすくんだり、なにかが自分を変えたのに気づいて驚いたりすること、その体験自体を大切にしたいのである。

### LESSON. III “話しかける”

このレッスンには、いくつかの形があるが、初めての人に体験してもらうには、4～5人の人が床に坐り、めいめい好きな方向をむいていると、2～3メートルはなれたところから、1人がそのうちの1人に話しかけられる、という形である。「話しかけられた!」と、思った人は手をあげる。

i) 最初の段階の中心は「聴くこと」であって、話しかけ手の吟味ではない。立ちあっている私が、きき手のひとりひとりにどんなふういきこえ、どんなかんじがしたかをたずねてみる。さまざまな答えが返ってくる。「テレビでしゃべってるみたい」とか、「号令かけてるみたい」、「ただ自分でわめいている」、「ひとりごとみたい」とかで、「きく人と関係ない」と言われたり、「声はこっちにくるけれど、ずっと手前で落ちてしまった」、「頭の上の方で、爆発したみたいにひろがった」、「みんなに言ってるみたい」、「だれにもいっていないみたい」、「通りすぎていった」など。また、「右の肩に声がさわったけれど、自分に言われた感じはない」とか、「こわごわ背中にふれてきた」とか、「ぱっときました」という言い方も出てくる。

ii)

① 話しかけ手の姿勢、身動きを吟味してみると――

- 1) 手を後ろにくんで、棒立ちになっている（声がとどかない）
- 2) 一所懸命に相手の方にふみ出して話しかけようとするが、言い終わるか終わらぬかにすっと身を退く（声がとどかない）
- 3) きょろきょろして、やっと決心して、声をかけるのだが、語尾のあたりで目を外らしてしまう（声が散らばる）
- 4) ムキになってからだを固くし、足をふみ出したりして一直線に声をぶつけようとする（爆発、通りすぎる）
- 5) ことば＝言語内容自体が、感想にすぎなくて他者への働きかけの動機をもっていない。たとえば、「私の気持ちわかってくれないかな」――自分では、話しかけているつもりだが相手とは関係ない。（声はたゆたっている）

これらに気付いてゆくと、身動き——という外的な言い方よりも、もっとからだの内部の心の動き、あるいはからだの志向性そのものが、そのまま声に現れていることが感じ取れてくる。

② 話し手が自分の声あまりにとどかぬことに驚き、次に姿勢や身動きに気付き始めると——

- 1) なんとか、自分のとじこもりをこえて、相手に声をとどかせたいと頑張りだす。すると、これはたいてい前項の4)になってしまう。そこで
- 2) 「だれでもいい、ここへよんできて」と提案して、その場にいる人には、目を合わさないようにしてしてもらおう。彼は呼ぶが、だれも気付かない。「では、どうする？」と促す。近寄って行って呼ぶ。今度は気付く。だが、呼ばれた気がしない、「横の人かと思った」などと答えが返ってくる。そこで、手をふれて連れて来ることにする。が、力づくでひっぱってもダメである。……こうして試みを重ねている間に、ふっと相手の人との接触感——じかにふれる感じが呼び覚まされてくると、ふっと相手が動く。すると声が、柔らかくなっている、小さくなる。

③ もう一度、始めの話しかけにもどってみる。

- 1) 始めからこの人に話そうときめて、意志で間の空間をトッパして声をとどかせようとする——これは相手との間に、明確な距離を確立することになってしまう。話すとは距離を0にすることなのだ。そこで
- 2) 4～5人のからだをみていて——「あ、この人に話したいな」とふっと思った人に声をかけてみたら、と促す。やってみると、ふっと、相手のからだ動くことが多い。
- 3) 自分は話したい気持ちがちゃんと動いているのかな、と確かめることは大切だが、それにこだわりつづけると自分にとじこもることになりかねない。話すとは、自分がカラッポになって、相手のからだに行く、至る、ことなのだ。

ふっと、「話しかけてみようかな」と思って動くということは、

実は、話し手がそのからだに呼ばれているということではあるまいか。そのからだに寄っていくことは、「招かれ」に応えることなのだ。話しかけるということは、すでに応えること——そして発せられたことば＝声が相手のからだにふれ、すっと内に沈んでゆくとき、相手のからだは動き始めふり返る。

すでに、自他のからだはこの場にある。すでにかかわり、つながっているのだ。メルロ・ポンティのことばをかりれば、「自他は、1つの系の2つの項である」。それを、生きること、たぐりよせること、よみがえらすこと、それが「話しかける」ということにすぎない。自分と相手のからだは、それぞれ閉じた個体では、本来ないのだ。

話しかけられるからだにとっても同じことである。ある大学で、私の不在中

に、学生たちが自主的にこのレッスンをやっていて、話しかけ手が突然わめいて逃げだしてしまっただけ、ということがあった。復元してみてもわかったことは、きき手の姿勢の問題であった。相手からくる声をきき分けようと身がまえるからだ、これは理科の実験のように相手の声を対象化し、分析し、分類しようとしているからだであり、つまるところ相手と距離をとり、人と人との場のつながりを気づかずに断ち切っている。話し手が孤独感に追いこまれたのは当然だったのだ。呼びかけられたら、ふっと動き出すようなからだを準備すること、共に、この場に「いる」ことが、人間であるということなのだろう。からだはすでに、話しかけ手に呼びかけているのだから。

#### LESSON. IV “砂浜の出会い” の1つの報告

このレッスンは、床に3～4メートルの正方形を描き、その中を仮に砂浜と想定して、ひとりそこに立つのである。なにが自分に起こってくるのか、起こらないでしらけたまんま、立ち会う人々の視線の前に身をさらすことになるか、だれも知らない。だが集中が深まってくると、砂浜の向こうに海がひろがり、小さな船が流れつくこともおこり、掘っていた砂の下に埋まっていた箱があらわれて、なかなか蓋は開かなかつたり、穴が開いて大地へころがり落ちるといったことも起こる。1人だけで自分の知らぬ自分の世界のあらわれに立会い、そこに生きるのが第一の課題である。が、その人の有様を見ていて、それにかわりたい、あるいはかかわらざるを得ぬ、と思った人がその世界に踏み込んでゆくことがある——ここまでいけば〈出会い〉のレッスンになるわけである。

ある女の人が砂浜に立った。足で砂をかきまわしながら、あちこち歩いているうちに、ふとなにかを砂の中につけ、しゃがみこんで拾い上げた。（後で彼女は、それを真珠のようなものと言った）彼女はそれを手のひらにつつんで大切に持ち歩き、やがてスカーフを外してそれに包んだ。しかしそれ以上にもすることがない。

やがて彼女は、片隅に立って長いこと下の方を見つめていた。（見ている人たちはどことなく死を感じたが、後で聞くとそこは断崖の上であったという。彼女は飛び下りようかと、ずっと考え続けていたのだという）やがてまたぶらぶらと歩き始めた。一時の緊張は解け、だらけた、どうにも変わらぬあてのない行き来だけが、えんえんとくり返されていた。このとき1人の女性がふと立ってじっと見ていたが、自分も砂浜に入った。寄って行って、歩いている人を見つめる。前の人も気づいて見つめる。後ろの人が、ふっと両手をそろえてお皿のようにして前の人の目の前に差し出した。「ちょうだい」と言っている、と見えた。前の人は首を振る。手を引っ込めないのを見て「ダメ、あげないわよ！」と叫ぶ。それでも手を出すのを見て、振り切って歩いてゆく。後の人もついてゆく。立ち止まるとまた手を出す。「あげないったら！」とまた歩き出す。

離れていった前の人を見送って、首をかしげていた後の人は前の人の後について一緒に歩き出した（実は、この時はどうしたらいいか、わからなくなっていたのだという）。前の人の身振りのまねを始めた。見ている人が思わず笑い出したので、前の人は怒って後ろの人をつきのけて、逃げだした。「いったいあんた、なにをしたいのよ!」、「あっちへいって」とことばを投げつけるが、後ろの人は、後へ退く様子がない。

前の人が、ずっと離れて、スカーフに包んだものを胸に抱きしめて坐り込み、閉じこもってしまった時、見つめていた後の人は、いきなり猛然と彼女につきみかかった。しがみついてスカーフをとろうとする。前の人が振りはなそうとしても離れない。逃げようとする、後ろから羽交じめにしてひきもどそうとする。相手が、どんなに「イヤよ!」と叫び、どんなに振り払い、叩き、つきとばしても離れない。（後で聞くと、この場で今この人とかかわらなかつたらもう私はない——いのちがなくなる——と一瞬の間に思ったのだと言う。）組んずほぐれつ、ころげまわりながら、しがみついて離れない姿は、もはやほとんどクラウン（道化）である。一方つかまれた人は必死になって、身をひきはがそうとし、「もう止めて!」、「もう止めて!」と絶叫し、ひっきりなしにしゃべりまくっている。見ている人たちは、笑い出し、いささか2人のしつこさに呆れ返り、またふき出していた。私はじっと見ていたが、立って近寄って、「ことばをしゃべるな!」と怒鳴った。その瞬間、前の人は大切にしがみついていたなにかを、スカーフごと胸からむしりとると、ぱっと投げ捨てた。捨てたとたんになにかが変わった。彼女はピタと黙り、静かになり、やがて彼女は、後からしっかりと自分を掴んでいた相手の方へ、ゆっくりと向きをかえ、手を差しのべた。2人は抱きあったままじっと喘いでいた。前の方は、後で、「どうしてもこの相手は私からはなれないと感じた時、ほんとに私を大切に思っているのだと感じ、愛を感じた」と喘ぎ、喘ぎ語った。

からだとからだが出会うためには、たぶん私たちは、一番大切ななにかを捨てなければならない。あるいは他者によって自分が犯され、そして突破されなければならない。その時初めて、私は他者が語りかけているなにかを聞きとることができ、そして、聞きとることができるということは、その時すでに答えているということであるだろう。そして犯したもののからだも、実は、相手のからだに呼びかけられて立ち、そして〈対話〉の中へと入っていったのだ。そして恐らくそれらのことは、はかり知れぬなにか大きな〈力〉に支えられていなければならない、起こりようのないことであるに違いない。